俳諧阿ちうし　全

へ 5
1894

あかさうし

師の風雅に万代不易有一時乃変化あり。この二つに究り
其本一也。その一といふは風雅の誠也。不易を知らされハ実に知れる
にあらす。不易といふは新古によらす変化流行にもかゝは
らす誠によく立たる姿也。代々の歌人の歌を見るに代々その
変化あり。又新古にもわたらす今見る所むかし見しにかはらす
哀なる歌多し。是先不易と心得へし。又千変
万化するものは自然の理なり。変化にうつらされハ風あら
たまらす。是に押移らすといふは一端の流行に口質時を得たる
はかりにて其誠を責さる故也。せめす心をこらさゝるもの誠の

へ 5
1894

変化を知るといふ事なし唯人にあやかりて行のみ也せむる
ものはその地に足をすゑがたく一歩自然に進む理也行末
いく千変万化するとも誠の変化は皆師の俳諧也かり
にも古人の涎をなむる事なかれ四時の押移如く物あらた
まる皆かくのごとしとも云へり師末期の枕に門人此後の風
雅をとふ師の曰此道の我に出て百変百化すしかれども
其境真草行の三ツをはなれず其三ツが中にいまだ一二
をも尽さずと也生前折々のたはむれに俳諧いまだ俵口
をとかずとも云出られし事度々也高く心をさと
りて俗に帰るべしとの教也常に風雅の誠をせめ

さとりて今なす処俳諧に帰るべしと云へる也常風雅にゐるも
のは思ふ心の色物となりて句姿定るものなれば取物自然
にして子細なし心の色うるはしからざれば外に言
葉を工む是則常に誠を勤めざる心の俗也誠を勤る
といふは風雅に古人の心を探り近くは師の心よく知べし
その心を知らざればたどるに誠の道なしその心を知るは師の
詠草の跡を追ひよく見知りて即我心の筋押直し爰に
趣て自得するやうにせむる事を誠を勤るとは云べし師の
おもふ筋に我心をひとつになさずして私意に師の道をとく
ることひとへに我の門をたてんと心得ふしも私の作を以て事す

門人よく己を押ふべし松の事ハ松に習へ竹の事ハ
竹に習へと師の詞のありしも私意をはなれよといふ事也
この習へといふ所をおのがまゝにとりて終に習はざる也習へと
いふは物に入てその微の顕て情感るや句となる所也たとへ
物あらハに云出ても其物より自然に出る情にあらざれハ
物と我二ツになりて其情誠にいたらず私意のなす作意也
唯師の心をよく知てさへあれバその所に自然の句ひとなり
終に発明せられハ探るに私意ある事を見て窮鑿せ
むるものハ古人も私意にかゝる事ありたゞおこたらず勉せん
實につきて古人を学ぶ用の事としてその名を世に残しえたると云風友の中

の名目となる功者に成給ひ師の詞にも俳諧ハ三尺の童にさ
せよ初心の句こそたのもしけれなとゝひくくいひかけれ
しかし皆功者に成給ひされし上書に令気を書ふところ
はあり或ハ先をこゝろせバ句気をいのしは先師も俳諧ハ気に乗れ
を志てしとおもふ也し物のよきをそこなふといひて気を生と
そこなひて謬をなすまゝある時ハ手跡ハ気をたのみして句をも
さるはいさゝか行ふ気をまもりしまて其の意之門人功者
になりて後句せんと私意を立て分別門に口を閉て深
く考るおのがまゝになりては人の出る事もなき毎年俳諧
ぬくる人よりか藝に進したる人もやゝ俳諧も

今とても師の言葉とてある俳書に見えたる師ののたまはく
学ぶ事ハつねにあり席に臨て文台と我と間に髪をいれす
思ふ事速に云出て爰に至て迷ふ念なし文台引おろ
せは即反古也ときひしく示さるゝ詞も有或時ハ大木倒す
ことし鍔本に切込む心得西瓜切ることし梨子くふ口つき
三十六句皆やり句なといろいろにせめられ侍るも皆功者の
私意を思ひやふらせんとの詞也師の心をよく執行し
つよく勤てそのうへにて業し云讃ある所なれ業すて
あかり出て出る節あるゆへにかく勤て心の位をおしゆる
速なるその勤くやいなや句を前にへし[?]を誡して[?]

心得せよ則時心細くなりては無二と師の遺ある
その物そく[?]して作為なく師のことやくこのみまんふ
人としての有様皆ふきて時去るに離いる節あるへし
新しみハ俳諧の花也古き物ハ花なくて木立ものふりたる
心地せらるゝ師常々新しみやせよやもとも新しみの句ひを心掛
たえなれば人々怠す我も我もとせめられし求之せ給て流行
せられしハ新しみ新しみハ常にせむる所也一歩も自然
にすゝむ地なり離れし名月に梨花雪やいつれくまの証
八雲不易なり花と見えて錦といひしハ新しみ
師の曰乾坤の変ハ風雅の種也といへり静なるものハ

三

不易流行之論あり不易之時としてたと見されハたと侮ふに
皆といふハ是をめ字を学ふ之風花雪月の数語るを第一
して見えぬ字をあされハおさ清らことを第一としその法くる様くり
清て詠みし句作り上師の詞を撰みて是るひちましいまゝ
んときく見えさる中にハ此をまとしみ難句の事のふりに根
出度をいふことはりを見るの境に入て撰れさためがたく云て
流行を考る蕉之句作手たるところのとまり誠つて真に勤て
趣を変じて雑ハその外に句と詠る内にも称勤るなど
ハなつかしき所なり新しきにかけて作る之
師のつまく俳諧ハ先優美にして一曲有ハ上手之みたくなきと云

珍しき物を見るハその詠之中に求めて多くハ地句之師の句
を本意とそのまゝ不といさゝか珍して

何の木の花とはしらず匂ひかな

此句ハ本意之所を何らずのおぼしき所をとらへて称をなる
本意なれの浅きにとゞまるを俳諧としてむせる句なりし

三十日月なし千とせの杉を抱あらし

此句も無類有とこた今まいれ奇の才のあらと見て
名にちかき三十日の月とある本意を余情あらしてれ俳なる
明の月

高水に星も旅寝や岩の上

此句ハ小町か石の上に旅寝せられハとさむし苔の衣

を詠みけるなんと云んとされてある句なるへし

ふとおもはれなく無名氏のあやめ草

此句ハ深くも次なくや五月のあやめ草といふ表の
句を承ての句なるへし

花のうへこくとふみ染ひけるなきさくても

いまハ蝉満寺の五重手掛りて紅染を

浸せる夕日のいと涼しけれハ

夕されやさくらに染むる浪の華

此句ハ古歌をおもひして其心を見せる作なるへし

ふとおもへハ横ふや舟の上

此句ハさせる事もなけれとも白露横江と云ふ斎文字の味合を
一つにひハ声や横ふとハ一声の江に横たふやとも句作る人
まも判ことて浪江の字抜くれの上とこそ添けて句ハ白露なか
し縦て宜る水光接天白露横江横句眼なるへしとそ

十日あまりハ月かさなりに山の根きハもくらく鈎の
端あたとくしてかぬへきあまたひこえる舟

枯野来て鶴啼なる波杜鵑の鳴聲れ鈴木小堯

山ふてのおとろく

さみに寝くおさ月をみし茶れ塊

此句古人の詞をおもはなして風情を取したるハ眼なれ

六

こして諸蕉有茶の謡と有さひたるに察てと初五文字
をしへ後よ句に拍子有てかゝれとて有さし茶の謡を書れし

ちる花や鳥もおどろく琴の塵

此の花鳥の意味をうけて詞を用ひられし句なるへし

稼穂ふ行年にむさき家郷かな

此句拙からぬれ称之云来集撰の時先師の出より遣ら
れしハ拙くりの発句一集にハあるへきをあそて遣らと

此境をひりくるゝといふるもこのる事にや

かさつむ里角嬉りさけと法師かな

此句ハ次の意乃詞をおもひ出しての句なり

観音のいらか見やりつ花の雲

此句の頃或集に其角云鐘ハ上野か浅草かと申しおなしき
されハ吟之庵病起の眺望成へし一聯二句の勝之句を作て句
とまとあはさきれけるへし

蚊虫や房を後おろし門の煙

住うちて哀に寒せよや坊か妻

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

此句ともに字余りにや余りれ句作の味ひハその境にいられ
ぬひろくしきかの余韻の山おろしよとある字余り
のるなと云出て永くて眼りかゝ花をふまへして味ふへし

二

初雪子ろはきれはの根つくる迄
此句山中に子ともと遊びてとおもあら初雪の興あさ
生せる句なれ共すまし先ハ実体之格なる了
若季候のくれハ風雅も師走哉
此句風雅も師走哉と俗をもって云ふ侍る事先師の心の
今の句に露やけてと云句なとふ蜂の羽音や田しといふ句
ありあらくひとたる心俗之味了
早稲の香やわけ入右ハありそ海
一ふしハ時雨るゝ雲か富士の不二
この句師の句をなして大さに入る句をいふ時なその心得あり

都中名ある人かゝれ玉ふけてくん世川といふ小川に童
ありふむと云句はりたる佳句にても千信をとるかれ
之有をも其の心をひを見る了みな此の句も山の深き雅
のみふをなくてハ東山とひとつに成了
梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
この句師の句をくたしをまて云る句にあら須梅と云ふくハ
しと詠てをりたる句之かくれたくの句ハ丈也んとハ云ふ
とも東武に赴くに餞してのか梅若菜と興て
まりこの宿ハとかひなれしてなゆくる一躰なり
二日にもぬかりハせしな花の春

この句ハ岩ひる海ていまてこころくひなつしてまかせ
あまた此句の時師の思ふ所ある処を故句を極めたり
此手ふ気に二日ふハといふをふもとハ佳なるふハといひて
ハあ留り要目子当りて出るくゆしとこ真角たひつりよ
あふきつの山をいふもあらんといふ不をあふとハ言ふ麁横
なる人ハいふ之の相なて

せりや御や鍬掃の鳴升の落紙

この句師のいふくたる捨まひやりさる句こと之井や特
名不きつしれなひやりさる所ありし
徳子京子の一本中くし梅の弟

此句まてをいせに詣て老師梅の句を尚もしに子ふる
の鈍れあるりに御一本なる花梅ありてあおに等下所
と社人の告るを句として行れ之師のいふく
むかしより此不子連俳の達人毎く句をもむすも続此
梅のことを見るもと頃ハしく出る之風雅のふかけあり
此を思ふもひ見れハやさかぬ不し

ミ部あれ後も清し句の花

梅こひて昇の高梅やくさくさ代

此雪れ句ハ楽田造る時の咏之を細れ風とふしくらん
をやきくぶ新しき位をよく来る梅ハ為に光る大嶺和尚

遷化の時の句ニ其の人を梅ニ比して庭ニ咲の花相等と
のふ之物ニよりて其ふんを述へ其のしれニ似せされ

稲妻を手ニとるやみの紙燭かな

この句師のいはく門人この席ニあやしき花を持たる其のよ
いひてきれ句ニとありその折やしたをいはんと見ゆかれ
ことし方ふきひしてものふみを咏れし

旅人と我名呼はれん初しくれ

此句も師武江ニ旅出の日此花之心の字まゐらし花を句作
物ニふりかへしてみえれん初しくれとハ云しを以さ句
きんを称ま不諸のえしをおほふして出のことく章は

門人ニ送られし一風情あるその文ニあり　其住定
ニ出る師の心のありかを味ふへし

何ニ此師走の市ニ行烏

此句師のいはく文字ハいきこころニ有と云事

おとろなきて正月ハ梅の花さかり

この句ハ立春の初夏ニ正月に梅咲るとそいひも
あへて卯月ならぬはかなきいはの声ハと称ふ心を宝あり　一作之

塩鯛の歯くきも寒し魚の棚

此句師のいはく心をいはすと句ニなる其の自頭ニなるもと之
精金を生て出ん初聴といふこそ心の本ニかれ人の知らぬ

わこみハもく猿のさけびし峯の月といふハ三角二様翻の趣
くさハ蘇老作之下七文の棚とたくえくる自句之といへり

　春立や新年ふるき米五升

此句師の口癖合しやとは一先其文字ありと悟られし
其のち後ハ春立やとありて短冊にも記り給ふ

　其を短冊に臨子見えと望度ある

いさらハ雪見にころふところまて
木からしの身ハ竹斎に似たるかな
山路来て何やら床しすみれ草
家ハみな杖にしら髪の墓参り

　灌仏や皺手合する数珠の音

此句ふまし先ハ灌合してと二字余りに聞えしかるを
いまやらんとみ文字をと木枯御ハ狂句木枯らしのと発して
之りたみ生菜ハ御ハ何となく何やら床しとうて家ハみな
一家をれとみ灌仏も御ハ新たん合やと学へし後学し
之られ侍る此例稚ある事也皆師の心のうち趣えしゆへ

　猪の床にもいるやきりきりす　さて

此の句目当ては初ハ床下に来て軒のゐるやきりきりすと依
といふ句ありしかへられ侍る

　菜料て居らるるや菊の花れ

此句始ハなをさりのやうなる比やと見え侍る事なし

風さへも吉野に趣し庭の秋

此句あるまれ庭を見るくの句之風吹来つゝひるを風とや

是より落る物してハまく兎とハ字ありてある中ゝあれと

それをとかく事に先生てしたる之

こんにやくにけふハうりかつ若菜哉

此句もしきハ蒟蒻を若文字を初作して後に是や

くになり侍るとぞ

鞍つぼに小坊主乗るや大根引

此句師の心すくみるや大根引と小坊主を見よく目をとる所也

句作ありと聞書

六月や峯に雲おくあらし山

この句落柿舎の句也雲置嵐山といふ句作習ありける

処とかへり

川風やうす柿着たる夕涼み

此句さゝみのいひ捨かんなりてはよりとぞ

雲雀鳴中の拍子や雉子の声

此句ひばりの鳴つけゝる中に雉子おりく鳴入しを

いひて拍子ある味をとらんとかゝりしてよきを究

からさけも空也の痩も寒の内

この句師のいまた心の味をえしらんと数日くるしみけるを
ある日ふと思ひよれる句と見え侍りし

蛇くふときけはおそろし雉子の声

此の句師のおもふくうつくしき鳥也雉子の姿なく
いふ事を離れ句とし蛇くふといふは老功のことなり

木のもとは汁も膾もさくら哉

此の句は師の此花見の句のかゝりをかしけれてつる
ことをきこえ侍りとぞ

たゝ鶯そこそこに餅屋ぶ牛の年

此句は世の月日のつくしみ家具ぶ此古郷に人の尋ねありとぞ

七夕や秋を定むるはじめの夜

此句秋はしめは名月の秋也二三日をとしめておもふく
ゆしさへて数日の後に秋のはしめと定め侍る也

此云乃かゝ錦をゝさし心の上

かけろふや仲つれ立のあへ

此句高田大仏の句也人の申すは此句はせし自在也
あて文六のすゑに定る也

明ぼのや白魚白きこと一寸

この句をし晩霜にして文字あまりの事
ことと云へり

年々や猿にきせたる猿の面

此案は師の心を人問し処に正く問し処にさし
答のある事を悔て云ひ捨たる也ハ

牛部屋に蚊の声くらき残暑哉

此句蚊の声よハし秋の風とせしへ候ニ改りて同字
二残暑の部とあり

梅が香にのつと日の出る山路哉

所まくらかしれ所きら上の鶴の膳

此二句ある俳書に梅ハ録文鶴の句ハ残暑之巻と
一体の趣こそいかんと門人の心ハ師なとて二句あれ侍るなし

ひやひやと壁をふまへて昼寝哉

是も残暑とかの門人心へハ師定とし

秋風の吹とも青し栗のいか

此句ハ花青をおもしろて句に立るに吹ともまえしと云
不可句とハ云してあらしけりとそ

見るかくく我を待よせる夜寒哉

此句も初ハ夜寒かくく我を待に見る心の形と丸後まぞきし

金屏に松の物ふりや冬籠り

此句も初ハ先山を絵に書て冬籠り之句ありしき

秋風や桐に動てつたの霜

此句椿うつく林の修りや蕎の露をたしかハ此作句
作ありて此林風之

團扇とりてあふかん人の後むき

此句集ともうつきえと云文字しても此文字後むき
せぬつきとある後ろてある句盤の後むきハ像の
賛之　寫形り童子のうちや　笠年

此句倒にあつくやむと云出ありけれ是ハ童子庭にゐ
甚やと中の七あり

一ともとてなつまらくの葉哉

此句を此妻文通に書え作りその後ハ其つかへ作れハ

師の曰此ならく云此作る作有りてあからぬ作る哉也

旅懐

此秋ハ何で年よる雲に鳥

此句難波にての句也此日かりそめに出て覚えたれし文
字に見えたる携をさられし

明月や池をめくりてよもすから

此句深川の名月之名月や此達のかふ堂の縁として
いまこそ後名月や海にむかへハもかしにもあらす
孕きは川ししきとかふに定る

蘭の香や蝶の翅に薫物

此句ハある茶店の作ちらん道やちらひしてたゞ出みあり
しを老翁せ不知り作ろみや西ニ清し露女料紙ひろく
句せ乞ふ手女のこゝろ我ハ此家の娘女なり故人ハあ
るし此事をきゝし作之先考あわし秋露をいふ娘女に書
きし其比難波の宗因此地にいらちりしてたんらけて句を
乞ひ得たる例おゝし花鳥の吟ともいひなしたきり
此そ作れんいふかくてかの難波の老人の句に蕉翁
のおつるの梅翁の集ちいふ句せ者女すしその句を
作りとあわらりしを名せてもとハかくいひ作りし文化
人の例ニ倣らせて此格とり作ものとも作られハ明しられ
なることなり

秋もまつつく雨ニ月の形り

此句も一先ハ時雨かくちらつくと秋の時雨哉と句作り右
いふかわひ語ひ作ろやいろして句作りしてんらんらう
反故の筆すゝく五と作ニ月の形と自然の趣をもおもしろく
作れり

魚ニ似ぬ象の句を出すもの猿

此句をかれさくいろし無加ハ格りて風らかさくろよ
事くよ初の字ハ作らろしやとも見なし

翁葉のまゝよう結て深し泥の泥

此句も風の土とましきえあり深しきといふ清く筏
なくハ明しらつれ作るら

人声や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに秋の暮

此二句のいつれをと人にとひ給ひしに行人なしと申せしに

其後所思といふ題をつけてあそはしけり

清滝や浪にちり込青松葉

此句もとハ大井川浪にちりなし夏の月と申されしを其比

ての句に案しかへられてかくハ直されけるとなん

桐の木に鶉鳴なる塀の内

これ句のさひ侍るやと尋ぬれハ何となく行灯の中に句を案ある

事にあらすなと侍れハさてハ其事ありと申されし

旅に病て夢ハ枯野をかけ廻る

此句病中の吟にて句作り侍りし様かけ廻る夢心といふ句作

ありと申されしかは侍るやと人にもいひしを此句に定まりし翁

終にハ此句を辞世とも申なりと

とかく後の世に残りけり迎るとなり

胡蝶にも成らて秋ふる菜虫哉

此句ハ季なし翁の時もなれぬ様の句にもあり

季なしとかいへ共季を用る十七文字にハさら

さし迎かくしといひつる事も侍らんさてこの句もなり

ける杖つき坂の句なと

門人の句に宿や家中の礼ハ星月夜の〔?〕ふかた
門、轉（?）星月夜を申出る句之味ふべしと
曰、松風子新涼を酒に山猿哉といふ句も山猿を夜盗
に出会しといへり、その秋の道乃庵りに集め、ともに名残告附
をきし、先の山路を去らざりけりと
曰、花の雲まことや山のさくらといふ句あて奇なる宗因
中句にしまく中ゆる句に取らし作れハ白〔?〕かかりれ
いかさま源氏の句にいられたり其の句にして見ぬ事と中すゆへき事を
中におかしき人の世を見ぬ秋の月ハあるまじとひらしれ哉
ても山男廉のいろかし　應和尾上のつら見らたまふことをと云

もその教之学者されどもわされ奇なる事といひなかりける
となり
曰、顔回ハありしはん金の声といふ句あてこれハ惑の二字分別
ありがたくもる金なるけさを結句いひ難しとする句といへり
曰、ねりやすれねぶり時雨に笠さしてといふ句あり是ハ
和歌理屈之ましらぬしと又指後に月といふと云へ定まる
曰、時なる代旅宿の笠の〔?〕ふんといふ句あり和の
調ひてより松をと引出しまとへ
曰、夢に旅見たる羽ふきでといふ句ありての五文字聯句
を用ひく心ひ和するハと之をみ五字の事ハ知るべからず

とても去所なりと也
口寄風や寿の中折形の香といふ句あり景気を以句形り
景色ハ古今の物之連歌ヲ京曲といひ一ツの宗匠ふ
はし之二代一並句ヲ以色帥以て手に紀有て有之兜は
俳子ハ連歌なとハいまた思ひ景気の句ハ姉ヶ谷也そて
はしくいましめ有之此表風ハ京曲第一之とかけるいさ事て
花の糸にといふ偏しと送られ侍るとこゝに京曲ハ元禄孫子
為也と宜宗何ものゝかと之寂並の急雨宜起以の宗匠の
御代木是亨抱新の香と侍る俳かくれり
師の日俳諧之連歌といふハうとく付出といふ宗之主心致侍記

乃ち諸ふも古句に心のかよふたる所ハなきむかし之人のいつくし
くさうを也てたゝしひおくる所なりとはる俳せて及み付なる
ハ千変万化すといへとも七ん十ろ和云侍とまひ所京氣を
以て之究り侍ろこうし師のいふるともおみある師の詞を孫たる
さ悟しくおとといへとも世上二三孫ニ至ル侍らふ和十二孫にも
見て侍る之翁中年第んや此道これ究め侍る中にし人
そ年々もさく雑ハ年々古不もいづとてもなる侍る之
師の日付といふ俳ハ句習得稿り推量なりて形を先より
起る所之まく論通せされハ及ちこ起不々り師の句を以て也
翁の語りとそいひて

あれくて来るは川原なら那
露れかしらせある雲の穂
落れ羽もふつくらいぬ初しくれ
一吹風の木の葉に成川中なる

此編二八おほ付一作の句是露の句ハ脚ながらしくあれ閑
おさ余りと法せてふ句なり是新ある作を編とし出来え
れ句ハ本句のおもてふ句是編上ハ珍しく府々見えし沙汰そ
後乃為れ分しきを見よと旬句の其の身そいふ也とあに
作乃紀句之

京の米の陽来ありやつけ太根

名さし入折る也宗乃娘

此編田し家の句をあそ付けたる之西と云の枝々見え篠の露かて句之見
さらへして見るとやその西枝くく
笠あしれ名乃さ破の名小雨雨

此編名平なとし付たる句是又ハ小破せて鍋ある風流也有之なるら之
秋の名あり見えしれ似る那
荻きし穂ましら萩に露そめらら

此編夏句れれ乃来をあそ付たる句なり
常枝平し庭の松やきほそく
堂近くりあるさいの見那

此御発句ハ位を見定めて手もなく付たる句也口伝哉
またくりの作合有様をみる

栗を枝ゟ落して蜂をたつね

古人ゟやつれ顔の夕暮し

此御風のさひし顔まくらてしの夜あそひといふ句
之付ハ其の梢泉ゟ高く見て山を以て付たる句也

おくそこ一見眺くて名木の梢

小車ゟ首の動くその山

この御あてら眺る日和その虫行りあるしの鏡
定眺めの山ろを見せてあるさまを付つる句也

市中ハ物の匂ひや夏の月

あつしあつしと門々の声

此御句ひや夏の月と有て見込して梅景を移して
見込の心を照す也

いそかしくの名をまきらハし春の草

こし取て蝶乃目をさまし初る

此御句ハ御きらしとゆふ山乃句にかけら蝶の
星取て枝毎に入りて見れを付たる句也

おくや角より出る夜の声

またふれ子かくれぬ梢かし

この御発句の作をよひなせて句にて縁しくなるあく付ところ也
縁の草履乃打ちらしたる春
なかしにおそ梅の館をうつ分て
此句意を付たるは一句ふ床夜の趣の続きたるとなりたるを
いふなるへし
文台おろしく気みはひしかる
離のあたせくはゆらにかれに猿ん
一句付たるかに在代のして一句ひ意を見るよ儀なり
笠のおふ径渥く面白き
過つさき門の半は

これ一句隠者の体にて句れ姿しきにて物を尽せ句
意新たなり
亀山やあらしの山やこの山や
ゐ上に碎く動きしれて
右句のやの字置きたるに碎てそ縁ある然せ付
新作一句風狂人の体也
野 松子 蟬の峰なるなる
歩行も旅も見かりれ人を新しして
右句れなきなるあるとひを新しきひきは勢ひ
をよひのくるさ気くなれ人の嫡なる身あく付たる句ひ堂

青天に有明月の朝ぼらけ
湖水の秋の比良のはつ霜
前句は初秋乃空に而銭起し湖水の秋比良の初
霜と続く皆しく秋の風情を含めり

伏中になく聞きり鳴から
猿引の猿と世を経る秋の月

前の二句すてゝ猿引の人の身になりて一句として世の
ありさまを付たれ

こそ〳〵として難を侘る月夜さ
蚕を飼ひに起るゝ秋

おもしろいふ句は秋の夕べ淋しき様を見せ人の哀
と云歌をもすべて物と思ひなして其身を哀なりて
起こる去来別人を言うくれ其心を二句なる所を

雑兵たくましく有情の上
前の詠新しき中にゆき
前句は全の字の意味に仕て霜雨一句は住居
其の流行付て掃除める所を見せてひしき中に
の新を付たる二様の字ひとりあり

雨にまけたる鎧ふるらん
双六の目を眠りて忘れたり

気味の句也跡は殊に老たる情ありて酒にもけ我也
老人の気味を付たる也

そつと眼付て酒の宮中

流石に老れは寝ては枯野の宵月

此句はそつとふ石に見透て宵から神ある辦してか
志のひ酒眼出しなる上戸のおかし花情を付たる也

煤掃の座を大かた出し

むかひ入を中おかり

前句の手せりしを中に元出せとくつろの乎
もある手也と座の早稲もりして中座りれ宴をありさ出せを付たる

名をおれあれに加ふる山風

旅乃紐をう有明し哉

紐を云字を取て旅を枕に依てむとへ山の志有りに旅寝
のさひしさを付てある也

ありあけ脈に伽るちは乃鳥

鹿郎ら高松に雲のあれる

前の句の意旅をふさとかけつるんの旅所やらき手と
旅寝に雲のかれるとちをかけてお句にひつけて付たる也

顔よせ来る村松乃声

有明のよし村鳥帽子声とありけり

前句のすゑをうけて其句の勢ひに移りて付くる句也

月見ると引起されて眠しき

螢あふら成羅の露

前句の揺れの移りをうつして付たる也句ハ美女の新枕なる也

牡丹折りし後こそゆかし

身うとく娘に告くる郎ら

心をうつし付たる句也

あはれ風の西をこはらぬ涙の音

下りすや白子の松

前句の心の移りを見て気をゑて移し付たる也

梅乃あるし柳をこれ先

弟本ハまゐらぬて生て絶る事あり

前句に言かけ縁る句ありのまゝ中字又こまらぬ子絶る

弟本をあはれる宿を付たる也

待ちに乃七尾乃名ハ住ら札

奥の背きをふる名をれ老人をんそて

前句の下に位を見通してあるべきを工ひ移して人

の雅を付たる也

中々に上司にこれハ書も不

わら屋の里の落ぶりかな

同し付様之

　抱しく松山磯辺有所

　あふ人毎に見くさきなり

同付之浜村なる人は松と見送るの和をさゝえ人の

孫と思ひ取りして付所なり

　旧る人通る往も無之

　薪を刈の子孫の髭古能

此句は通る孫か内の孫作し付る之此句は往を

思ひ為してあるのみにつけなし付るる之

故に上下の流れ寄るし

　独子枝さへ宿乃気遣ひ

此句を気遣ひ独ひそ句を見取して付る也

底の字ぬられ学也

　而肩れ果取りしては淡くみ

　ぬつきぬ焼かり梅の出しの

此もある事つきる事を思ふるを気遣く付る句所

思ひ取るにもかきれもある人まるを云ふり

　隔へてもきてさし様せつきて浅

　屏風乃陰乃蚊遣の菓子盆

同し付之無と見る昧ふるにもならしめ様る也

山の句にして新しきなり

　入込に諏訪の涌湯の夕ぐれ

　　中にもせいの高き山伏

前句にはまりて付たる句也中にも七尺男子ゑて

ゆひたる句なり

一　人声の沖には何を呼やらん

　　鼠は舟をきしるあかつき

この句ハ沖ハ人の鼠か舟きしるなどといひ出

られ作者に前句の声といふ字を会せて付り

見る暁の字肯おもて人の心を沖の舟新きなるの

に仕立ても舟きしるなどといひて八下の古人におくれたる

ひといつて師なきて空といふ

　梧の木がらしに風かんと吹

　　寒き炉に住おれひとり様もなし

皆下しめが住おれさ寂しく見えて住林の字除かれし也

　　桐の木高く月さゆる也

　門しめてだまつてねたる面白さ

この事先師のいえる侭ハ門しめての一句

一　様を書ぬり試に前に門人毎々ハ皆活らずのひとつ

句に出来しあるき芳生といふ句に老師の添作

北寿
　さゝめことといふハ此あらたに北寿
　火ともつるとよめるこしらす
　一年の作をむき蓑におさまりて
此弁こんとのふてれ句千年句斗ゆしかんとの
是に焚せられしとそ
　　市人よいく是うらん雪の笠
　　酒の戸たゝく鞭のられ柳
　鞭うちたり先のゝ母衣を引つけて
此弁三八門人杜国か句也此弁は先人と人の号鞭くいふ
出作らま鞭のいたし此弁の附をあまきあるへかれ

鞭を用ひをたくとふそのは風雅の人々なれとも
これ作るすし精枝の風流よ是めくハ武者の知武
才にあるへからすとそ
　　歩行ならハ杖つき坂を落馬哉
　　角おすかめぬ牛もあるそのゝ
此句もと門人土芳か句也先師此句を風と作られ菊
那と皆偏しを見らへしと何かおゆしきあり
つけて見作れるもさら作よのかれしてふと此句を見と
作れハ其作しをて其の作にて付られ作白師の心味
ふかし

4年10月